
東方幻想主

88813

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想主

【Zコード】

N1911BA

【作者名】

88813

【あらすじ】

博麗神社の祭神「博麗の大神」他結構な人数のオリキャラが、幻想郷でハートウォームなフルボットをしつつ過ごして行くお話。弾幕はもつと放てる！ 身体はもつと避ける！

博麗の大神（はくれい の おおかみ）

主人公にして最大の問題児。博麗神社の祭神なのだが、かなり昔から博麗神社を離れてわらわらやっていたため殆どの巫女が存在すら覚えていない。

元々人から神に「成り上がった」存在であり、信仰で力が増減したりする事は殆どないとのこと。

能力は「事象を司る程度の能力」

魂魄幻夢

白玉楼に仕えている事になつていてる半人半靈。大神と付き合いの長い友人であり、剣の使い手。常に腹に一物据えているようで、案外そうでも無い。

なお、白玉楼の庭師の妖夢は彼の妹である。

能力は「物体の切れ味を良くする程度の能力」

弓張 光

ゆみはり ひかり

紅魔館の「完璧で隙の無い執事」

目つきが悪く、寡黙で、表情は乏しいのだが案外適当で常識人。完璧で瀟洒なメイドのうつかりをさりげなくフォローしつつ、門番と共にシエスタを楽しむさり気なく最も自由な執事。

能力は「あらゆるものをキャンセルする程度の能力」

弓張影

紅魔館の「元壁で隙の無い執事」の弟。

とある理由で紅魔館を去り、迷いの竹林で迷っているところ、輝夜と妹紅の殺し合いにばつたりと出くわし、気が付いたら永遠亭か妹紅の家に居つくよになつた。兄とは違い、表情豊かだが若干短気。能力は「あらゆるものを蓄積させる程度の能力」

柚木 誠 ゆずき まさと

魔法の森に住む魔法使い未満の少年。

が出来る。

能力は「魔法を理論化し、扱う程度の能力」

00・登場人物（後書き）

登場人物紹介というわけでした。オリキャラ沢山ですが、よろしく
お願いします！

世の中には、あらゆる者を全て受け入れる「幻想郷」という土地が存在する。そこでは、人、神、靈、そして……妖が共存しており、恙無く生活していた。

そんな土地には、博麗神社という神社が幻想郷の外れにひっそりと存在する。お世辞にも規模が大きいとは言えない、むしろ廃れており、まともな運営がされているやもわからない。何を祀っているかすらわからないとまで言われている神社である。だが、その神社は幻想郷と外の世界を隔絶する「博麗大結界」の起点にもなっている。

そしてこれは、その神社に祀られているとある大神が、幻想郷に戻ってきた頃の話になる。

「げえ、俺が少し出ている間に神社が寂れっちまつた。」

そんな情けない声をあげるのは、博麗神社の祭神……博麗の大神であった。

「外」の時代は既に平成という年代に入しており、近代化の波が田舎にも押し寄せている頃の夜の事である。大神がたまたま友人と「里帰り」を敢行しようと山奥の神社へと足を運んだ時の事だつた。神社には、誰も居なかつたのだ。人つ子一人。それどころか、雑草がわらわらと生い茂り、最早廃墟と言われても謙遜ない様な神社が目に入った。

そこにはかつての面影も無く、只々無残に時に残された神社がぽ

つりと、淋しそうにあるだけだったのである。まさか大神自身も、これが自分の神社であるはずがないとタ力をくくっていたが、この辺りに神社は一箇所しか無く、他に動いた気配もなかつた。

「うわ……」じりやあ酷いな。大神、どうする？」

そう、さほど心配しているよつには聞こえないような声色で、友人が彼に問いかける。友人、……魂魄幻夢は、賽銭箱があつたであろう石段に腰掛けながら、上着のポケットに入っている煙草を一本取り出し、咥えた。そのまま火をつけようとしたが、当の大神も煙草を取り出そうとしているため、しばし待つ。

「まさか五百年くらい空けたら神社がこうなつてはなー。ま、結界用の札を貼つているみたいだし、恐らく無くなつてはいる訳では無いんではないかね。」

そう口に出し、大神は咥えていた煙草に火をつけ、紫煙を肺へと送り込む。そのままふはあと吐き出しながら、幻夢に問いかげた。

「お前さんはどう見るよ。幻夢。」

「そりやあ結界があれば、考える事は一つじゃないのか？ 相棒。」

そう問いかげに返し、幻夢はニヤニヤと笑いながら煙草の煙を吸い込み、一段落つけると月を見上げた。

その姿を見た大神は悪戯つ子の様な笑みを浮かべ、やはり月を見上げた。紫煙が、闇夜へと吸い込まれて行く。二人は虫の鳴き声を聞きながら煙草の火を消し、結界用の札を見据えた。

「だよな相棒。結界があるなら、すり抜けてやるのが人情つて奴だな。」

「その通り相棒。結界はすり抜けるものだろ?」

そうやりとりをすると、彼等は結界を抜けるための行動に移った。その方法は、結界へ降り注ぐ月の光に自らの神力・妖力を乗せ、一定量を送り込んだら、自らの身体を転移させる方法であつた。

結界というものは、理論の產物である。完全に隔絶する結界といふものは存在しないというものが、その理論の根底に存在する。何故なら、完全に隔絶するという事は大氣や光をも遮るという事に繋がるからである。結界の内部に生命が存在するならば、生きる為に最低限必要とされる大氣や光は通さないとならないのである。また、月光というものは、魔力性を帯びているとされており、まず確実に結界を通り過ぎるものと考えられている。何故なら、大抵こういつは結界を張る者は魔力であつたり妖力を供給する為の手段を得なくてはならない。少しでも多く供給するのならば、月光の魔力性は欲しがるというのが定石だ。

少なくとも、そうであると二人は経験から考えていた。だからこそ、すり抜ける為の手段であつた。過去に結界を抜ける為、様々な方法を施行した中の、最もセオリー通りの行動であつたのである。力を送つてから数十分経つた頃、二人は結界を抜け出すことに成功したのであつた。

01・5・1・1・（後書き）

5・1・1・/d j・n a g u r e o・b e a t m a n i a I I D X

この曲は、beatmania IIDXシリーズの最初期に収録されたものである。この物語の導入に相応しいタイトルとして、この曲を選ばせてもらつた。

この作品は、各サブタイトルでBEMANIシリーズの曲名をタイトルとして進行していく。機会があれば、是非とも聴いて欲しい曲である。

と、硬い感じはこちらで終了で、読んで頂き、誠にありがとうございました！ 穴だらけの理論を述べたりしますが、それについてはご都合主義という事にしていただけだと嬉しいです。

毎話毎話、サブタイトルの曲についての解説とかもあとがきでありますので、そちらも読んで頂けると幸いです。

身体がぐにゅりと引っ張られていく感覚。いつも一人のセオリ一通りの行動とは言え、この感覚には慣れない二人は感じた。そして地に足が付き、あたりを見回すとそこは結界の内部である事が感じ取れた。結界の外よりも生い茂る山林、多少は「マシ」になつた神社がその証拠である。

「どうやら成功したみたいだな。俺は我が家で寝るとして、幻夢はどうする?」

「んー、とりあえず彼岸を田指すかな。」

「あー……そう言えば……。」

大神が幻夢に問いかけると、幻夢は多少バツの悪そうな顔をしながら答えた。本来ならば彼は彼で、冥界に存在する御屋敷……白玉楼へと戻る事になる。と言うのも、過去に白玉楼へと足を運ぼうとした際、どう言つ訳か戻る事が出来なくなつたのだ。その時は丁度近くを通りかかった死神を捕まえ、理由を説明させると白玉楼はつい最近、別の場所へと動いたと言う。およそ百年前の事である。

実際のところ、幻夢はほほ家出同然で白玉楼を出たのであるが、ちよくちよく折りを見ては戻つていた。しかし、白玉楼自体に行けない事になつてしまつた為、それ以降会う事は出来なかつたのであつた。

それを察した大神は、少々バツの悪そうな顔になつたが、幻夢自身は気にしない様に続けた。

「ま、最悪彼岸から経由するだけだからな。そんなに辛くはないでしょ。」

「まあ、閻魔様に睨まれなけりやな。」

「と言つ事だ。悪いが俺はもう出るぜ。」

氣をつけるよ。と一言投げかけると、幻夢は夜の帳を落とした山道へと消えて行つた。本来ならば、結界の内部がどのようになつているかを把握しないで動き回るなど言語道断である。しかし幻夢はおろか大神も、その辺りの野生の生き物や妖に遅れを取るほど弱いと言つわけではない。自衛の手段は持ち合わせているのだ。だからこそ大神は幻夢の姿が消えるのを確認すると、神社の本殿へと踵を返すのであつた。

「さて、久しぶりの我が家でどう過いすかなー。」

そう呴きながら本殿へと入ろうとすると、目の前から光る弾の様なものが彼目掛けて飛んできた。すぐさま横へ飛んで避けると、本殿の扉が開く。そこには十代半ばと言えるほどの少女が仁王立ちしていた。

「こんな夜に堂々と神社の本殿に入り込もうとするなんて、余程命知らずの馬鹿なのね。」

「んあ？ と、すつとぼけたように弾を放つた主を見据えると、彼女はさらに攻撃を加えようとしていた。

「おい待ちな。俺はこの神社の祭神だぜ？ 勝手に住み込んで本来の主を追い出そうとはいひ度胸じやねーか。」

「何言つてゐるの？ あんたは。この神社はね、信仰を忘れ去られてしまつて、最早何を祀つてゐるかも誰も知らないのよ。」

「な、なんですとお————つ————！」

その直後、情けない大神の叫びと共に、大量の弾が彼へと襲いか

かつたのであった。あまりの出来事に呆然とした彼は、回避すると言つ事を忘れ……見事に全弾ぶち当たるといつミスをやらかしてしまつたのであった。

「……おい、手加減しろよお前。」

ボロボロになりながら力なく反論すると、少女はあっけらかんとこつ返した。

「嫌よ。何で敵に対して手を抜かなくてはならないの？ それに、私はお前つて名前じゃないわ。博麗靈夢つて言つ素晴らしい名前があるの。」

「博麗……もしかしてお前、こここの巫女か何かか？」

そうね。ヒピシャリと返されると、大神はむくりと立ち上がり、ズカズカと本殿へと入つて行つた。あまりにも突飛な行動に、靈夢は目を点にしてしまつたが、すぐに冷静になると、こつ怒鳴り散らした。

「あ、あんた！ 勝手に神社に入らないでよー！」

「知るか！ 僕は元々こここの祭神だ！ と言つたか巫女、靈夢とか言ったつけか？ お前はまず自分の神社が何を祀つているかを覚えてから仕事しやがれ！ 今からこの僕様がこここの祭神である事を証明してやる！ 主に話し合いでな。」

靈夢の怒号に対応するかの如く、大神も怒鳴り散らしながら本殿の中心に座り込んだのであった。

02・coming true（後書き）

coming true/GUROOVY VS . L . E . D .
jubeat ripples

coming trueには、願いが実現すると云つ意味がある。大神は白いの神社へと戻るという願いが実現した。幻夢もきっと、白玉楼へと戻るという願いが、実現するのだろう。

楽曲としては、恐らくあまり馴染みのないジャンルの曲になってしまつが、曲の盛り上がりなどが分かりやすく、お勧めの一曲である。

この曲は本当に好きな曲ですけど、ジャンル的にはハードコアになるのなあ？ jubeatでは上下左右対称の回転譜面で、L\ .\ 9ではかなり面白い譜面だと思いますよ。

こんな感じですがよろしくお願ひしますー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1911ba/>

東方幻想主

2012年1月5日22時50分発行